
アテネとメデューサ

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

アテネとメデューサ

【Nコード】

N3442B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

美しい髪を持つメデューサという女神のことを知った知恵と戦いの女神アテネ。彼女はメデューサに対する感情を自分ではわからな
いでいた。その感情とは一体何であろうか。同性愛を扱ったもので
す。

「そうなの」

「はい、とりわけ髪の毛が」
「髪の毛が」

女にとって髪の毛の美しさは命と呼べるものである。それを聞いてアテネ自身も自分の髪を見た。

綺麗な髪であった。ブロンドでそれが程よく巻いている。その巻き具合も光沢も。人間のものとは全く違っていた。神の美貌がそのまま現われていたのだ。

この髪はアテネの自慢の一つだった。髪の毛では誰にも負けない。そういう自信すらあった。

だが。それが今崩れようとしているのだ。それで苛立っていた。崩れようとしているには訳があった。それは。他ならぬ彼女の従者が言っていた。

「この世のものとは思えない程に。それはもう見事なものだろうです」

「そんなに凄いのね」

「はい、私もまだ実際に見たわけではありませんが」

鼻はそう断ったうえで述べる。

「今下界はその噂で持ちきりだそうです」

「それ程素晴らしいのね」

「らしいです」

「ふん」

アテネはそれを聞いて左手の人差し指の腹を口に当てた。その格好で考えはじめた。

「だったら」

「御覧になられに行かれますか？」

「いえ、そこまでは」

思っではいなかった。だがどうにも自分の中の苛立ちを消せそうになかった。それを消す為には。彼女は鼻に顔を向けてこう命じた。
「貴方に頼めるかしら」

「私にですか」

「そうよ、そのメデューサの髪の毛を実際に見に」

「行けと仰るのですね」

「嫌ならいいけれど」

「いえ、滅相ありません」

梟は恐縮してそう返した。

「私はアテナ様の僕。喜んで」

「行ってくれるのね」

「勿論です。アテナ様が命じられたならば火の中水の中」

「そうなの」

畏まって言う梟。だがアテナは彼のその態度の中に本心を見ていた。仮にも知恵の女神である。それを見抜けないアテナではなかったのだ。

(やつぱり彼も)

その澄んだ海を思わせる青い目に愁いを含ませて梟を見ていた。

(見たいのね、彼女が)

それを思うと苛立ちがまた募る。しかしそれを表に出すことは彼女の誇りが許さなかった。

「では行つて来て」

「畏まりました」

その声はやはり待つてましたと言わんばかりであった。内心それがどうにも面白くなかったがやはり口にも顔にも出すことはなかった。黙つておいた。

梟は飛んでいく。アテナはそれを見送りながら一人思った。

「皆メデューサ、メデューサつて」

実に面白くない。

「何がいいのかしら。全く」

最後にそう呟いてワインを口にする。だがそれでも気分は晴れはしなかった。

梟はすぐに帰つて来た。すぐにアテナに報告する。

「メデューサ様ですけれどね」

「どうだったの？」

喜んで帰って来たのを見れば予想はつくがあえてそれを気付かないふりをして彼に尋ねた。

「やっぱりお美しい方でしたよ」

梟は満面に笑みを浮かべてそう述べた。

「やはり神様の血を引いておられますから。それで」

「そうなの」

「御覧になれますか？」

「そうね」

ここでも演技をして何気ないのを装った。

「じゃあお願いするわ」

「わかりました。それじゃあ」

梟の目が光った。そしてアテナの横にその光から映像を映し出したのであった。

そこには優しい顔立ちの女がいた。小柄で容姿はまるで少女の様である。それが確かに美しい。とりわけ噂になっているその髪はアテナでさえ目を瞠るに足るものであった。

第二章

虹色に輝き程よく波うつておりそれがまるで虹の海のようなのである。それが腰にまで伸びており彼女の少女めいた美貌に拍車を加えていた。紅の唇も象牙の肌もエメラルドの瞳も。それすらもその虹の髪にはかなわなかったのだ。

アテナはその姿を見て思わず言葉を失った。呆然とさえしていた。「どうでしょうか」

ここで梟が映像を消してアテナに尋ねてきた。

「メデューサ様は」

「そうね」

その言葉に我に返って返事をする。

「確かに綺麗だわ」

それは認めた。

「けれど」

「何か？」

「いえ、何でもないわ」

それから先は言わなかった。この梟に何が欠けているかというところの心というものを知らないことだろうか。アテナもまた女なのである。神であっても。そしてその感情は一筋ではないのだ。幾筋もが複雑に絡み合っている。そうしたものだということには気付きもしなかったのだ。

それからどうもアテナはおかしくなった。メデューサを見てから彼女のことはかり思う。腹立たしくもあり。そして。それとはまた別の感情もあった。

「ねえ」

そんな中で梟に声をかけた。

「メデューサだけけれど」

「はい」

「今何処にいるのかしら」
彼女の居場所を問うた。

「何処とは」

「今何処にいるの。姿を見たのだから知っているでしょう？」

「言いませんでしたっけ」

「聞いてないわ」

本当に聞いてない。だから尋ねているのだ。

「それで。何処なのかしら」

そのうえであらためて問う。

「今彼女がいる場所は」

「レスボス島ですよ」

「あそこなのね」

小アジアに浮かぶ小島である。ギリシアとは近い関係にある。

「はい、あちらに」

「わかったわ、それじゃあ」

アテナはそれを聞くとすぐに立ち上がった。

「レスボスに行かれるのですか？」

「そうよ。ニケにお願い。留守番をね」

「はあ」

梟は応えた。ニケとはアテナの従神であり勝利を司る。戦いの神でもあるアテナにとっては何かせない従者である。

「じゃあすぐに戻るから」

「わかりました。では」

「貴方も来るのよ」

「えっ、私も」

御供を言われてその丸い目をさらに丸くさせる。

「だって貴方が見てきたのでしょうか？だからよ」

「ああ、宜しいのですか？」

恐る恐るアテナに尋ねる。

「私も御一緒にして」

恐いのではない。期待しているのだ。またメデューサを間近に見られることに。それがまたアテナにとつては腹立たしいことであるが口に出すわけにはいかないのが重ね重ね辛い。

「だから来てつて言ってるのよ。わかるかしら」

「わかりました、それでさ」

そそくさとアテナの側にやって来る。

「すぐにも参りましょう」

「ええ、ではレスボスへ」

「はい」

こうしてアテナは梟を連れてレスボスへやって来た。そこは緑と花の美しい島であった。

「さて、この島の何処にいるのかしら」

「メデューサ様の神殿はあちらです」

梟は島の東の方を指し示して言う。

「まずはそちらに向かいましょう」

「ええ」

「けれどすぐに御姿を拝見できますよ」

「どうしてかしら」

アテナはそれに問う。

「それは何といてもお美しいからです」

梟はその顔に笑みを浮かべてこう述べた。

「もうすぐにも」

「そうなの」

その言葉にまた不機嫌な感情を抱いたがそれも口に出しはしない。

そして梟の案内を受けてメデューサの神殿に向かうのであった。

行く途中でアテナはふと姿を変えた。いたいけな感じの少女に。

「何故御姿を？」

「私が来たということになれば大事になるでしょ」

アテナは梟に答えた。

「オリンポスから急にどうしたことかと」

「そういえばそうですね」

言われてやっと気付く。だがこの言葉は偽りである。

「だからよ」

彼女は自分の心を隠していたのだ。

「こうして小さな女の子になっていればね」

「私はこのままでいいですかね」

「貴方は大丈夫だと思っわ」

「左様で」

「外見は普通の梟と変わらないから」

「わかりました。ではそのまま」

こうして少女に姿を変えたアテネは梟を連れてメデューサの神殿に向かった。神殿は落ち着いた白を基調としたものであった。質素でとても美貌の女神がいる場所とは思えない。

第三章

「ここなのね」

「はい」

梟は神殿の前に来たアテナに答えた。

「間違いありませんよ」

「そう、ここなの」

アテナは神殿を前にしてどうにも首を傾げていた。

「何か？」

「いえ、案外大人しい造りだと思って」

神殿を見て彼女もそう思ったのだ。

「アフロディーテの神殿だったら薔薇で、アルテミスの神殿は銀で飾られているのに」

どれもそれぞれの神の象徴である。アテナもアテナで自身の神殿をオリーブで飾っている。

「デメテル叔母様のだったら豊かな穀物だし。そういうのはないのね」

「そんなのメデューサ様には必要ありませんし」

梟は言う。

「本当にお奇麗ですから」

「本当に是非見てみたいわ」

アテナは何気なく言う。

「じゃあ今からね」

「はい」

女神とその従者は神殿の中に入った。中もさして広くはなくアテナの神殿や宮殿とは比べくもなかった。だがそこに差し込む光や立ち込める香りは。とても普通のものではなかった。

「この香りは」

かぐわしくかつ優しいものだ。ふと梟が見せてくれたあのメデュー

「サの姿が思い浮かぶ。」

「メデューサ様の香りですよ。」

「そう、やっぱり。」

梟の言葉に頷く。

「生憎香りは忘れてしまったので。」

「いい香りね。」

アテナはその香りの中に身を委ねながらこう述べた。

「落ち着くわ。」

「はい。」

「そのメデューサもそうなのかしら。」

「ええ、そうですよ。」

梟はそれに答える。

「ですから一度御会いになられればと。」

「そうね。じゃあここに来たのは正しかったのね。」

「そうですね。」

「で、彼女は。」

「もう少し先です。」

アテナの前を飛びながら言う。

「奥におられますよ。」

「もう、じゃあ。」

「はい。」

アテナは梟の案内を受けてそのまま進んだ。そして。遂に彼女と会うことになったのであった。

「貴女達は。」

神殿の一番奥に彼女はいた。その姿は梟が見せてくれたのと全く同じだった。優しくで可愛い少女の姿をしていた。小柄である虹色の髪もある。それを見てアテナは内心に抱いている複雑な感情をまたもたげさせた。

（全く違うわね）

まずは自分自身の姿と比較した。

(何もかもが。私と)

彼女は背が高く、凜とした顔立ちをしている。美貌を誇ってはいるが決して可愛いというのではない。可愛さなぞ彼女には無縁であった。優しげな雰囲気もない。彼女自身は心優しい方だがそれよりも規律を重んじる為どうしてもそれが表には出ないのだ。そうした自分自身と比べてどうにも心中穏やかではなくなったのだ。

(けれど)

第四章

その中には様々な感情がある。嫉妬もまたある。だがそれだけではなかった。彼女はその他のものに誘われてここに来たのだがそれには気付いていなかった。嫉妬だけには気付いていたが。それを押しさえ込もうとして他の感情には気付いていなかったのである。むしろ嫉妬よりもそちらが大きくなっていたのにである。

「ここに住む娘でございます」

アテナは身分を偽ってこう述べた。

「メデューサ様に御会いしたくてこちらに参りました」

一礼して恭しく言う。

「私にですか」

「はい」

少女の声で答える。

「お美しいと御聞きしまして」

「私は別にそんな」

今目の前にいる少女が誰なのか気付いてはいない。只の人間の少女だと思っていた。だが。メデューサは相手が人間であっても決して驕ってはいなかった。純真な少女のままであった。

「そんなに美しくは」

「その髪の毛は」

「この髪の毛もまた」

彼女は言った。

「母であるガイア神からの贈りものですから」

「そうのですか」

「はい。ですから私は別に」

アテナは話し掛けながらメデューサの心を見極めていた。どうにも偽りではないようであった。

「自慢するということはありません」

「しかし美しさは」

「この世には美しさよりも大事なことがありますから」

「それは」

「心ではないでしょうか」

彼女は言った。

「どれだけ美しくても心が醜ければ。何にもなりません」

「はあ」

これはアテナにとっては中々こたえた言葉であった。実は今彼女は嫉妬という醜い心を抱いていたからである。それを思うとどうにも聞き逃せない言葉であった。

「私は。心を大切にしたいのです」

「では自慢されることは」

「だからしたくはないのです。静かに、穏やかに」

「過ぎさせたいのですね」

「誰かを好きにもなりたいですけどね」

「えっ」

この言葉は全く予想してはいなかった。驚きのあまり本来の姿を出しそふになる。

「どうしました？」

「えっ、いえ」

慌ててその場を取り繕う。

「何でもありません」

「そうですか」

「誰かを好きに、ですか」

「男の方でも女の方でも」

「女の方でも」

「はい」

当時のギリシアにおいては同性愛は普通のことであった。あの女好きで有名なゼウスも美少年を側に置いていたことで知られている。神々もまた異性だけではなく同性も愛していたのだ。

「それは。やはり無理ですかね」
「はあ」

何故か自分自身に言われている気がした。

「是非にと思うのですが」

「それもやはり縁ではないでしょうか」

アテネはそうメデューサに述べた。

「縁があれば」

「それだといいいですけど」

何か物憂げになる。その顔もまたいいものだった。

「けれど。誰もいませんから」

「女の人でもいいのですか？」

「ええ」

その質問に頷いた。

第五章

「さつきも言いましたが」

「わかりました」

その言葉を確かめてから頷いた。

「ではメデューサ様に相応しい方が現われますように」

「ありがとうございます。じゃあ」

「はい、これで」

何とか正体を明かさなのまま話を終えて神殿を去った。神殿に出るとアテナはまずほっと胸を撫で下ろした。

「危なかったわ」

少女の姿のまま呟く。

「もう少しで変身がとけるところだったわ」

「一体どうしたんですか、あんなに驚かれて」

「何でもないわよ」

変身を解き本来の姿になって答える。

「何でもないって」

「だから何でもないわ。気にしないで」

「アテナ様がそう仰るのならいいですけど」

釈然としないが彼女がそう言うのなら従者としてはもう言うことがなかった。

「戻るわよ」

アテナは間髪入れずそう言った。

「もうですか!?!」

「彼女のことはわかったから。もうここには用はないわ」

「わかりました。それじゃあ」

「ええ、オリンポスへね」

アテナと従者はすぐにオリンポスに戻った。戻ってから彼女は暫くの間自分の宮殿の中に閉じ籠り外に出ようとはしなかった。

そして外から見える虹と自分の宮殿の至るところにあるオリブを交互に眺めていた。眺めながら思索に耽っていたのである。どうにも落ち着かない様子で。

そうした日々が暫く続き。ある日彼女は梟を自分の部屋に呼び寄せた。

「どう為されました？」

彼は彼なりに部屋に入ったままの主人を心配していた。

「近頃どうも」

「これを」

梟の言葉を遮るようにしてオリブの木の皮をであった。

「これは」

「メデューサに送って」

それは手紙だった。文字が書かれていた。だが梟はそれには目を通さなかった。礼を守ったのである。

「いいわね」

「メデューサ様にですね」

「ええ」

よしと言った。彼はそれを受けてその木の皮を嘴で受け取った。

「それでは」

その次に足に持って飛び立つ。そんな彼にアテネは心配そうに声をかけた。

「きつと届けてね」

「はい」

何が何なのかよくわからないまま頷く。挨拶を終えて梟はメデューサのところに向かうのであった。

それをメデューサに届ける。手紙を見た彼女は怪訝そうな顔をしていた。

「アテナ様がですか？」

「はい、そうです」

梟はメデューサに恭しく答えた。

「是非にと言われまして」

「そうなのですか」

「それで。宜しいですよね」

手紙を手渡したうえで尋ねる。

「そこに何が書かれているのかはわかりませんが」

「え、ええ」

メデューサはその可愛らしい顔に戸惑いを見せながら答えた。

「アテナ様さえ宜しければ」

「はあ」

梟はそれを聞いて一体何が書かれていたのか気にはなったがやはりそれについては尋ねはしなかった。従者としての分を守っていたのだ。

「喜んでお受けするとお伝え下さい」

「ではそれで宜しいですね」

「はい」

梟の言葉にも頷く。

「アテナ様に宜しくと」

「それでは」

梟はその言葉を受けてメデューサの下から去った。そしてそのままアテナのところへと戻りメデューサの話を伝えるのであった。

「そうなの」

アテナはまだ部屋に閉じ籠っていた。部屋の中で梟からメデューサの返事を聞いたのだ。

「よかったわ」

「といますと?」

「いえ、何でもないわ」

一瞬だけ微かに笑っていたがそれはすぐに消えてしまった。

「とにかくわかったから」

「はあ」

「お疲れ様」

「私の仕事はこれで終わりですか？」

「そうよ。これは御褒美」

その手にオリーブを出して梟に与えた。アテナのオリーブはまた特別なもので普通のオリーブよりもかぐわしく、そして油も美しいのである。

「これをあげるわ」

「有り難うございます」

梟はオリーブを受け取ると嬉しそうに頭を垂れた。それから機嫌よくアテナの側を後にする。その途中飛びながら考えに耽っていた。

「それにしても」

彼は思う。

「一体何なのだろう」

この話が気になるのだ。

「アテナ様も思わせぶりだしメデューサ様の御様子も」

何か引つ掛かる。頭のいい彼はそれに気付いていたのだ。だが。

「まああれこれ詮索するのは止めておくか」

彼は従者である。やはり従者が主に疑問を持つのはよくないことだ。ましてや彼の主は神、しかも知恵の女神である。そうした存在に疑問を持つのはやはりまずいのだ。

第六章

「さつきも言いましたが」

「わかりました」

その言葉を確かめてから頷いた。

「ではメデューサ様に相応しい方が現われますように」

「ありがとうございます。じゃあ」

「はい、これで」

何とか正体を明かさなのまま話を終えて神殿を去った。神殿に出るとアテナはまずほっと胸を撫で下ろした。

「危なかったわ」

少女の姿のまま呟く。

「もう少して変身がとけるところだったわ」

「一体どうしたんですか、あんなに驚かれて」

「何でもないわよ」

変身を解き本来の姿になって答える。

「何でもないって」

「だから何でもないわ。気にしないで」

「アテナ様がそう仰るのならいいですけど」

釈然としないが彼女がそう言うのなら従者としてはもう言うことがなかった。

「戻るわよ」

アテナは間髪入れずそう言った。

「もうですか!?!」

「彼女のことはわかったから。もうここには用はないわ」

「わかりました。それじゃあ」

「ええ、オリンポスへね」

アテナと従者はすぐにオリンポスに戻った。戻ってから彼女は暫くの間自分の宮殿の中に閉じ籠り外に出ようとはしなかった。

そして外から見える虹と自分の宮殿の至るところにあるオリブを交互に眺めていた。眺めながら思索に耽っていたのである。どうにも落ち着かない様子で。

そうした日々が暫く続き。ある日彼女は梟を自分の部屋に呼び寄せた。

「どう為されました？」

彼は彼なりに部屋に入ったままの主人を心配していた。

「近頃どうも」

「これを」

梟の言葉を遮るようにしてオリブの木の皮をであった。

「これは」

「メデューサに送って」

それは手紙だった。文字が書かれていた。だが梟はそれには目を通さなかった。礼を守ったのである。

「いいわね」

「メデューサ様にですね」

「ええ」

よしと言った。彼はそれを受けてその木の皮を嘴で受け取った。

「それでは」

その次に足に持って飛び立つ。そんな彼にアテナは心配そうに声をかけた。

「きつと届けてね」

「はい」

何が何なのかよくわからないまま頷く。挨拶を終えて梟はメデューサのところに向かうのであった。

それをメデューサに届ける。手紙を見た彼女は怪訝そうな顔をしていた。

「アテナ様がですか？」

「はい、そうです」

梟はメデューサに恭しく答えた。

「是非にと言われまして」

「そうなのですか」

「それで。宜しいですよね」

手紙を手渡したうえで尋ねる。

「そこに何が書かれているのかはわかりませんが」

「え、ええ」

メデューサはその可愛らしい顔に戸惑いを見せながら答えた。

「アテナ様さえ宜しければ」

「はあ」

梟はそれを聞いて一体何が書かれていたのか気にはなったがやはりそれについては尋ねはしなかった。従者としての分を守っていたのだ。

「喜んでお受けするとお伝え下さい」

「ではそれで宜しいですね」

「はい」

梟の言葉にも頷く。

「アテナ様に宜しくと」

「それでは」

梟はその言葉を受けてメデューサの下から去った。そしてそのままアテナのところへと戻りメデューサの話を伝えるのであった。

「そうなの」

アテナはまだ部屋に閉じ籠っていた。部屋の中で梟からメデューサの返事を聞いたのだ。

「よかったわ」

「といますと?」

「いえ、何でもないわ」

一瞬だけ微かに笑っていたがそれはすぐに消えてしまった。

「とにかくわかったから」

「はあ」

「お疲れ様」

「私の仕事はこれで終わりですか？」

「そうよ。これは御褒美」

その手にオリーブを出して梟に与えた。アテナのオリーブはまた特別なもので普通のオリーブよりもかぐわしく、そして油も美しいのである。

「これをあげるわ」

「有り難うございます」

梟はオリーブを受け取ると嬉しそうに頭を垂れた。それから機嫌よくアテナの側を後にする。その途中飛びながら考えに耽っていた。

「それにしても」

彼は思う。

「一体何なのだろう」

この話が気になるのだ。

「アテナ様も思わせぶりだしメデューサ様の御様子も」

何か引つ掛かる。頭のいい彼はそれに気付いていたのだ。だが。

「まああれこれ詮索するのは止めておくか」

彼は従者である。やはり従者が主に疑問を持つのはよくないことだ。ましてや彼の主は神、しかも知恵の女神である。そうした存在に疑問を持つのはやはりまずいのだ。

第七章

「とりあえずオリーブは貰ったし私の仕事はこれでおしまい」
それに満足することにした。

「さて、このオリーブで」
何をしようか考えていた。そちらに考えを巡らせるのであった。
アテナはオリンポスのオリーブの木の下に一人いた。そこでた
ずんでいた。

その服装は何かえらく着飾っていた。普段の化粧気のない彼女か
らは想像も出来ない姿だ。髪もよくまとめられて身体も清めている。
美しい彼女がさらに美しく見えた。

「もうすぐね」

誰かを待っているようであった。

「来たら」

「あの」

そこで彼女に声をかける者がいた。

「アテナ様」

「来たのね」

その声が出た方にすぐに顔を向ける。するとそこに彼女がいた。

「メデューサ」

「手紙読みました」

まず彼女はこう言った。

「こちらに来て欲しいとあったので来ましたけど」

「そう、だから来てくれたのね」

「はい」

メデューサはこくりと頷く。

「まずは来てくれて有り難う」

「いえ、こちらこそ」

メデューサは謙遜してそれに返す。

「オリンポスに招いて下さるなんて。何と言えばいいのか」

「そんなの大したことじゃないのよ」

アテネは口元に笑みを浮かべてこう述べた。

「大したことじゃないとは」

「これからは。貴女が望むなら何時でも来ていいのよ」

「はあ」

オリンポスに来ることが出来るのは神々でも限られているのだ。

こうして招かれてもしない限り他の神でも入ることが出来はしないのである。

「わかったわね」

「そうなんですか」

「ええ、何時でもね。それでね」

アテネはメデューサを見詰めながら話をはじめた。

「貴女をここに呼んだ理由だけねど」

「はい」

「その髪ね」

「髪……」

「そう、この髪だけねど」

ここでアテネはメデューサの髪をその手に持った。

「綺麗な髪してるわね」

「有り難うございます」

メデューサはアテネの手を受けながらそれに答えた。

「私の髪よりも美しいわ」

「いえ、そんな」

「謙遜はいいのよ」

アテネは強い声で言う。

「綺麗なのは。本当のことだから」

「はあ」

「私の髪よりも。ずっと綺麗」

言葉に少し嫉妬が混じる。

「その顔もね。私のはまた違っわ」

今度はその可愛らしい少女の顔を見る。

「何もかも。実はね」

また語りはじめ。

「貴女の前とは前から聞いていたのよ」

「そうだったんですか」

メデューサはそれを知らなかった。今アテナから言われてよっやく気付いたのであった。

「前からね。けれどこの前の少女だけれど」

「あの鼻を連れていた」

「そう、あれは私だったのよ」

アテナはそのことを今明らかにした。

「アテナ様が」

「貴女を見たいからね」

「どうしてですか、それは」

「それはね」

アテナは少し下を向いて顔を背けた。そのうえで述べる。

「貴女の話聞いて。それでどんな姿なのかこの目で直接確かめたかったから」

「そうだったんですか」

「隠していて御免なさいね」

「いえ、それは」

そんなことを気にするメデューサではない。許すまでもなかった。

「私は別に」

「そう」

「それよりもそれで私を見に来られたんですか」

「奇麗だと聞いてね」

「奇麗だから」

「今ここに呼んだのも同じ理由よ」

アテナは言った。

「最初はね、話を聞いていると腹立たしかったのよ」

メデューサに顔を向けてこう言った。

「それでも他に何かあって」

「他に」

「それで実際に会ってみて」

さらに言う。

「何となくわかって。いまやっとわかってきたわ」

「何なんですか、それは」

「私はね、貴女のことを好きなのよ」

「私が」

「ええ」

アテナはメデューサの顔を見詰めてきた。曇りのないその澄んだ目で。彼女の顔と目を見ていた。

「私は。貴女のことを好きなのよ」

「アテナ様が私を」

「それをね、貴女に言う為に」

「オリンポスへ呼んで下さいましたのね」

「駄目かしら」

アテナにとってはじめての顔であった。自信なさげで頼りない顔になった。いつもの凜として自信に満ちた顔が消え失せていた。如何にも心配そうな顔でメデューサを見ていた。

「私では貴女に。相応しくないかしら」

「いえ」

だがメデューサはその言葉に首を横に振った。

「私のことを。好きでいて下さるんですよね」

「それは」

アテナは弱々しい様子でこくりと頷いた。

「変わらないわ。今の気持ちは」

「そうでしたら」

メデューサはこのうえなく優しい微笑をアテナに向けてきた。

「私なんかで宜しければ」

「いいのね、私で」

「はい」

全てを受け入れる笑みであった。

「こちらこそ。私んかがアテナ様に」

「女だけれど」

「私も女ですよ」

ギリシアでは神であろうと愛に性別は関係ない。

「同じですよ」

「そう、同じなのね」

アテナはその言葉に何か救われた気持ちになった。

「私も貴女も」

「そうだと思います」

メデューサはまた述べた。

「だから好きになつて」

「それを受け入れて」

二人は自然を歩み寄り合った。そして。

「じゃあこれからは」

「はい、二人で」

抱き合つた。今二人の心が結ばれた。

「私は愛を知らないけれどこれからは」

「二人でそれを育んでいきましょう」

「そうね、二人で」

「二人ですつと」

恋を知らない筈の処女神が。恋をしてそれを実らせた。緑のオリブの木の下で。このうえなく優しい抱擁を交あわせるのであった。恋を知つて。

アテネとメデューサ

2
0
0
6
・
9
・
1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3442b/>

アテネとメデューサ

2009年2月16日18時10分発行